

留学生相談担当・学生指導のディシプリン化と戦略的配置に関する基礎研究

代表者：中本 進一（国際本部・国際企画室 教授）

1 研究の目的

「グローバル人材育成推進事業」「世界展開力強化事業」「留学生交流拠点整備事業」等、大学の国際化を加速させるグローバル展開を趣旨においた事業が国策として展開される中、学生や研究者の派遣・受入れにおいての世界基準も重要なポイントとなってきている。その意味で、今一度本学の留学生相談体制の在り方を再構築するために、最新の情報を収集・分析しつつ、どのような位置づけで配置するのが最も教育的効果をもたらす、戦略的であるのかについて調査・分析することを目的とした。

2 研究の進め方

先ず、「留学生相談担当・学生指導」のディシプリン化に関しては、文献調査（一部ネット調査を含む）に特化し、全国的動向を分析した。また、相談体制の戦略的配置に関しては、神戸大学、香川大学、岡山大学、岐阜大学と規模や体制の異なる相談体制モデルを抽出し、集中的にインタビューを実施し、各大学から関連資料を収集した。また論点の一つとなる専門性についても担当者との協議を重ねた。

3 研究の成果

○ 「留学生相談担当・学生指導」のディシプリン化

横浜国大の門倉によると、高橋の研究を例に挙げ、「留学生指導研究の『実践性』と『社会性』に独自の意義を認めるとともに、留学生への対応に『ゲッター化』してしまう危険性に注意を促し、高等教育の国際化課程と言う広い視野で自らの役割を見直す必要性」について述べている¹。さらに、国立大学留学生指導研究協議会（COISAN）のシンポジウム等においても、留学生指導に当たる担当は、周囲の人たちとのネットワークを結ぶことで留学生交流・指導をより豊かにできるし、まさにそのコーディネーター力こそが、ディシプリンの一つであるという結論を得ている。

○ 各大学の留学生相談体制

- ・ 神戸大学：留学生相談に係る教員全てが日本語教育の経験を経ている。留学生センター構想の中で「日本語教育」「留学生相談指導」「交流」の3部門体制を敷いている。相談部門では、地域、OB、学生サークル、各国学友会との連携を深化させつつ、学内における「見える化」に重点を置いている。
- ・ 香川大学：全学留学生会との連携、国際交流サークルへの指導を主軸に、留学生センター（日本語教育＋留学生相談指導）の体制を堅固している。まさに Student-centered approach を具現化した形である。
- ・ 岐阜大学：国際企画の事務職員が主に留学生相談を担当している。但し、担当者とのインタビューでは、事務職員だけでは限界があり、教職協働体制を望んでいるという回答を得た。
- ・ 岡山大学：留学生相談担当は、留学生相談のみに特化し、海外留学（派遣・受入れ）にかかる相談は別組織が特化して実施している。留学生相談の主な業務は、地域のボランティアとのコーディネート、国際交流サークルの活性化、各国留学生会の活動内容把握、そして何より、「全留学生」（正規生）に対する生活オリエンテーションの実施（年10回近く）である。

¹ 『留学生交流・指導研究』 Vol. 12, pp. 7-8, 国立大学留学生指導研究協議会, 2010年3月

○ 本学があるべき体制

国際交流センター（または留学生センター）が改組されたことに関し、全国各大学からの反応は様々であった。センターであるが故の一極集中化による利便性や独立部局性に関する利点はあるものの、可視性に関しては、センター体制が必ずしもよいとは言えない。この違いは大学の規模がポイントとなる。即ち、大規模大学ではセンター体制が機能するが、中・小規模大学の場合、国際戦略構想を巻き込んだ企画機能を有さない限りセンター体制が周辺化する危険性を含む。

従って、グローバル人材育成推進事業＋留学生交流拠点整備を最大限に生かすという意味において、以下の体制を提案し、本研究のまとめとしたい。

